

大見村における無住化集落再生活動の発足と展開 —京都市北部における無住化集落再生活動（その2）—

			正会員	○松崎篤洋*
			正会員	山口純*
			正会員	本間智希**
無住化集落	再生活動	アクションリサーチ	正会員	川勝真一***
廃村	消滅集落	大見	正会員	北雄介****

1 はじめに

日本の地方には今度、過疎集落のみならず無住化集落が多数生じるだろう。このような無住化集落は不法投棄の温床になるなどの問題をもたらしている。しかしこうした無住化集落は、市民が中心となって新しいライフスタイルを探究するフロンティアとなる可能性を持ってはいないだろうか。

2 研究の目的と方法

本論は京都市左京区大原大見町（以下「大見村」という無住化集落の再生の試みを取り上げる。大見村は京都市の市街地から約 30 キロ北にある山間部の集落である。その1で述べたように大見村は 1973 年に集団離村し、無住化集落となった。2008 年、元住民の子孫である F が移住し、2012 年からは村の再生を目指す「大見新村プロジェクト」が活動を始めている。

その1)では、大見村の歴史と地域資源を明らかにするとともに無住化に至った経緯を述べた。その2)では、大見新村プロジェクトの発足と活動の経緯を報告する。研究の方法としてアクションリサーチを採用している。筆者らは大見新村プロジェクトのメンバーとして活動に参加している。このアクションリサーチとしての研究方法がもたらす含意についてはその3)で述べる。

3 プロジェクトの発足と活動の経緯

3.1 メンバー

メンバー大見新村プロジェクトは現在 22 名のメンバーが参加している。大見に住んでいるのは冒頭に述べた F 一人のみであり、他は主に京都市などの市街に住んでいる。また大見村に地縁があったのも F のみである。メンバーの所属としては会社員、研究者、学生などであり、建築・デザイン・アートに関わるメンバーが多い（22 名中 12 名）。大見に住む F のみが農業を生業としている。

3.2 活動の場所

プロジェクトの活動は、主に京都市中心部のオフィスと大見村の二カ所で行われている。オフィスはメンバーが主催する建築系の研究所を借りており、ここで月 2 回の定期ミーティングが行われる。大見村においては、F の親族が所有し F が居住している古民家の一部と、それとは別にある小屋を拠点として利用している他、F 家の所有の

畑や、山林にも活動場所は展開している。

3.3 プロジェクト発足

前述の F は、2007 年より農業を行ってきた。F の親族が大見の出身者であり大見に農地を有していた。そこで京都中心部の自宅から大見に通って農業をおこなっていたが、2008 年より大見に住むようになった。2011 年より「COLPU(一般財団法人地域公共人材開発機構)」に就職し、そこで著者のひとりである川勝と出会った。川勝は建築系の研究所 (RAD) を主催している。F は大見に訪問者用のトイレが必要だと感じており、川勝にトイレの制作を相談した。そこで川勝が単にトイレを作るだけではなく、無住化集落となっていた大見村の再生活動としてプロジェクト化することを提案した。こうして 2012 年の 6 月に、RAD のメンバーと、別の COLPU のメンバーを加えた 5 人でプロジェクトを発足させた。この時点でホームページと Facebook ページを作成し、メンバーの募集を始めた^{1),2)}。

3.4 大見での活動とその多様化

プロジェクトの発足直後における大見での活動としては、トイレの制作や、拠点とする小屋の改修、周辺の清掃などを行ってきた。

メンバーの数は 2012 年度中に倍増し年度末には 12 人となった。そして 2013 年度末で 17 人、2014 年度末で 22 人と増加した。メンバーが増えるにしたがって活動内容は多岐にわたるものになった。

そこで、2014 年度よりは、「部」や「班」に分かれての活動を行うようになった。たとえば、水やエネルギーなどのインフラを整備する「インフラ班」、大見の民家や土地所有などの調査を行う「リサーチ班」、畑を整備してハーブ等の作物を育てる「開墾部」、古民家の整備を行う「拠点部」、狩猟と革鞣しなどを行う「狩り部」、あるいは洪水で崩壊した「大見思子淵神社」を再建する「シコブチ部」などがある。大見村の再生という大きな目的については共有しつつも、メンバーの各自が異なる関心や意図によってプロジェクトに参加していると言える。

3.5 オフィスでのミーティング

一方、京都市内ではプロジェクトの運営に関するミーティングを行ってきた。ミーティングは当初不定期であったが 2012 年の 9 月より月 2 回の定期ミーティングとし

で行っている。2013 年の 4 月より「事務局」を設けて、運営に関わる事務をメンバーで手分けして受け持っている。ミーティングでは議事録を Google Drive によってメンバー間で共有している。Facebook での投稿や議事録によって活動を振り返ることができる。ミーティングの議題として、全体的な運営体制やルールについてのものと、個別的な企画についてのものがある。前者にも多くの時間が割かれており、運営体制やルールは常に変化している。

4 プロジェクトの活動の例

4.1 ミーティングにおける議論：定住から二拠点居住へ

定期ミーティングにおいては運営体制やルールに関する概念的枠組みの再構成がたびたび試みられてきた。例えば、人々のプロジェクトへの関与のあり方や程度は多様であるために、「何をもってプロジェクトのメンバーと呼ぶのか」そして「そもそもメンバーという呼称が妥当か」、「『村民』と呼んではどうか」などが議論されてきた。また大見に「定住」することと、定期的に通ったり非定期的を訪れたりすることを連続的に捉えるために「〇割村民」（定住は「十割」、たまに訪れるのは「一割」といったような概念が生み出された。このようにして、プロジェクトのメンバーと、それ以外のワークショップなどの参加者の位置づけ、そして定住者とそれ以外の関係者の位置づけを連続的に捉えることが試みられた。

このような議論を通じて、プロジェクト開始の初期に設定されていた 2022 年までに十世帯の移住を実現するという目的には拘らずに、大見村と京都市中心部をまたぐ「二拠点居住」のあり方に焦点が当てられるようになった。ただしこの点に関してもプロジェクト内での立場は様々であり、あくまでも定住者の獲得を重視するものもある。

4.2 シコブチを通したつながり

2013 年 9 月 16 日の台風によって大見川は流路が変化するほどの大きな氾濫を起こし、村は畑の作物が流されるといった被害にあった。このとき大見川に面して建てられていた「大見思子淵神社」が川に流されて倒壊した。プロジェクトでは畑の復旧活動とともに、神社の再建活動を開始した。その 1) でも述べたように大見思子淵神社が祀る「シコブチ」は安曇川流域で信仰されている（シコブチの漢字表記は神社によって様々である）。プロジェクトメンバーの D は、安曇川の下流である滋賀県高島市の住民であり、もともとシコブチ信仰という流域文化に強い関心をもっていった。プロジェクトに関わるようになったのも大見に思子淵神社があるためであった。大見思子淵神社の再建活動では、この D が中心的な役割を

果たした。2013 年 12 月から倒壊した神社の解体を始めた。解体は外部の参加者も呼び込んでイベントとして行った。また解体には大見村の元住民も参加した。神社の再建活動をきっかけとして新しいつながりが生み出された。

4.3 鹿革を通したつながり

現在日本中で鹿が増加していると言われており、鹿による農作物の被害（獣害）も増えている。実際に大見でも F や「開墾部」が鹿に農作物を荒らされている。害獣駆除として狩られた鹿は、現在の日本ではそのほとんどが廃棄されており、肉や皮が利用されることは少ない。またそもそも、人間の利益に基づいて動物を害獣と呼ぶことが妥当なのか、人間と動物はいかに関係すべきなのかといったことが問われる。こうした問題について考える機会を持つことも目的として、2014 年の 6~8 月には燻煙を用いる古来の手法で鹿革を鞣す連続ワークショップを行い、のべ 68 人の参加者を集めた（図 1）。



図 1 革鞣しワークショップの様子

5 結論と課題

本論では大見新村プロジェクトの発足と活動の展開について述べた。プロジェクトでは大見村の再生という大きな方向性は共有しつつも、多様な主体が異なる関心にしたがって参加している。そのため全体としてプロジェクトはとりとめのない印象をもたらすものとなっている。

プロジェクトの活動に関していくつか具体例を見てきた。ミーティングを通して運営体制に関わる概念的枠組みが議論され、大見での活動においては川や鹿革といったきっかけが人々を結びつけた。その 3) ではこうした活動の展開を、アクター・ネットワーク理論によって検討する。

参考文献

- 1) 大見新村 Facebook ページ : <https://www.facebook.com/oomishinson>
- 2) 大見新村ホームページ : <http://oomi-shinson.net/>

*立命館大学

**RAD -Research for Architectural Domain-

***京都工芸繊維大学

****京都大学

* Ritsumeikan University

** RAD -Research for Architectural Domain-

*** Kyoto Institute of Technology

**** Kyoto University